



みずみどり

2017年 5月15日 第120号

発行：いたばし水と緑の会事務局

年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会
<http://mizumidori2.eco.cocacn.jp>E-mail : mizumidori@nifty.com

〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124

トンボ池にコサギが来た

2月、トンボ池の2カ所に浸透穴を掘り、池は浅くなりました。3月の梅まつりには産卵に来たカエルが見られました。カエルは20匹ほどいたようですが、卵塊は5つ、多くありません。浅い池にカエルの卵が沈み、黒いぶつぶつになり、オタマジャクシになりました。暖かくなってザリガニがあちこちでうごめいていました。

4月15日の見学会では、オタマジャクシ（食べられたらしく卵塊の割に数は少ない）、新しい卵塊2がありました。

15日城址の見学会の後、トンボ池にコサギがいて歓声があがりました。猪鼻さん記「トンボ池に来ていたコサギは大勢のギャラリーに驚き一旦林に引き上げたが、直ぐ池に降りてきて、片足を前に出してコチョココチョと探りを入れ出てきたザリガニを、あっという間に3匹平らげて飛び去りました。」(写真：猪鼻昭二)

ザリガニ退治はコサギにやってもらおう、と思ったが

19日(水)、雨が降り続いたので、浸透穴の浸透効果が低下し、水位は上昇していました。ザリガニはやっぱりいて、深いところに多いようでした。卵塊はなくなり、新しく孵ったらしいオタマジャクシが浅いところに集まっていた。浅い水際は



コサギやゴイサギ（夜行性なので証拠はない）も餌を捕りやすいところです。

ザリガニだけが悪者ではなかった

自然は私たちに都合よくできていません。ザリガニを食べるコサギはオタマジャクシの味方とはなりません。

カエルは1500個～8000個の卵を産むと書いてあり、そのほとんどが食べられてしまい、無事に豆カエル（1cmほどの小さい蛙）になって上陸し、成長して大きなカエルになれるのはほんのわずかだそうです。はかない命なのです。

2005年に干上がった池にいたオタマジャクシが日干しになる寸前に、手足が出てヒョコヒョコ出てきたことがありました。待ち構えていたかのようにムクドリの群れがきて、片っ端からついばんでいました。

また、ミニトンボ池の傍で豆カエルたくさん跳ねていたことがありました。ザリガニのいない池で且つ水鳥に認知されない場所（多分それは昔よくあった小さな水たまりでしょう）が、安全な場所ではないかと思えます。トンボ池だったら、水草がジャングルのように茂っていると見つからずに生き延びる個体もあるでしょう。



3月には、20匹ほどのカエルが来て卵を産んだ（卵塊は5）。

4月に入ってさらに2カ所で産卵した（卵塊は全部で7つ位）。

それから・・・

オタマジャクシ達の人生にはいろいろあったのでしょうか。4月26日に生き残っていたオタマジャクシはこれだけ。20匹いるか、いないか。

29日、オタマジャクシは見当たりませんでした。何者かにたべられたようです。たくさんの命が姿を消しました。生き物の世界は厳しいですね。

全体にもっと浅くしたらどうなるか、

今年もどうしたらザリガニを減らせるかを考えます。人手で駆除するには限りがあります。外来種とは言え、生き物を無駄に死なせてよいわけではないので、私はできるだけ持ち帰って唐揚げにしたりして食べていました（これはこれでおいしいです）。残酷！なんて言わないで。生きている生き物を調理して食べる行為は生々しいですが、もともと人間は生き物の命を食べて生きています。でも池にいるザリガニは、自然の生き物の餌になる方が自然です。ザリガニを喜んで食べる生き物に来てもらうのが一番です。

池の水が深いとき、枝に止まっていたカワセミ（次頁）が、さっと降りてザリガニをくわえて、



さっと枝に戻りました。今池の奥の枝は切ってしまったので、止まり木がありません。ならば深みのそばに杭を立てたらどうかしらん、だけど公園の中の小さな池なので、屋間はカワセミもコサギも警戒して、おちおち餌をとれないかもしれません。夜行性のゴイサギは来ているかもしれません。

26日、試しに池に入る水量を絞ってみたところ、棚田1と2をのぞいて、池は干上がり、狭くなった水域にザリガニが集まっていました。稚エビもたくさんいました。中ぐらいのザリガニは少なくて、ほとんどが大きなザリガニでした。中ぐらいの大き

さは、食べられやすい大きさなのかもしれません。この日、ハサミの立派な大きいのを40匹捕獲しました。他に食いちぎられた死骸も数匹あり、ゴイサギなどの餌になったザリガニも多かったかもしれません。

池が干上がると、確かにザリガニの数も減りますが、土に潜ってまた池に水が溜まるのを待っています。トンボのヤゴの方が先に死んでしまいます。これからトンボが卵を産みに来るし、冬にはトンボのヤゴが越冬します。池を干上がらせないで、ごく浅い池として様子を見ていきたいのですが、うまくいくかどうか。

バッタ広場に春が来た

4月19日、バッタ広場に行ってみました。エノキの若葉にチョウチョ（アカボシゴマダラ）の幼虫がいました（写真右）。ゴマダラチョウの仲間は、冬になると木の枝から地面に降りてきて、枯れ葉にくっついて越冬し、春になると木に登って新芽色になって、若葉をどんどん食べて大きくなります。バッタ広場では、徹底的ではありませんが手入れをしたり、人も歩きまわります。そのなかで無事に枯れ葉と一緒に越冬したようです。

7日後の4月26日には早くもサナギになる寸前でした（写真は次頁）。そして、4月29日、サナギは見当たらず、抜け



殻もありませんでした。野鳥のご馳走になったのか、虫好きに連れ去られたのか。バッタ広場にはコムスジ、ツマグロオオヨコバイ、クモ類、ハムシ（クワハムシ?）、テントウムシ、アカヒメヘリカメムシ、チャイロハバチ、蛾の幼虫2種などがいて賑やかになってきました。



大きくなった幼虫は
エノキの若葉色

エノキの出てばかりの若葉に「虫こぶ」がいっぱい付いています（写真左）（エノキハトガリタマフシ）。

虫こぶは寄生昆虫などによって、植物組織が異常に発達してコブのようになったものをいい、コブの中に幼虫が入っています。



バッタ広場は、草刈の時期ややり方などによって、環境が変わり、生き物もいろいろ変わります。

趣旨の説明などをきちんと掲示して、来た人にバッタ広場の目的を理解してもらるようにしましょう。

（坂本 郁子）

スズメが格闘していた



4月20日、朝の散歩途中、若木でスズメが激しく争っていました。近付いても逃げません。まるでサスペンスドラマです。擁壁の上に逃げるのを追いかけて、もつれながら転がり落ち、下でもみ合い、また崖を登りながら争い、上でもみ合い、また転がり落ちて、とやっていた。写真で見ると愛らしいですが、本当に人間の格闘のようでした。写真を日本野鳥の会の川内先生に送ったところ、まさに巣場所争いの戦いだということ

ことでした。2～3月によく見られ、けっこう迫力があるそうです。よく撮れていると褒められました。

スズメも住宅難で、近くの高い擁壁の水抜き穴で並んで巣を作っていたこともありました。数年前には近くの広い敷地の屋敷がなくなって建売住宅が建ち並び、別の空き地もなくなりました。スズメも餌をとる草がなくなって、苦労が多いですね（坂本 郁子）。

戦中戦後の田舎生活のこと（1）

折に触れ話してきた子供の頃の田舎生活について綴ってみた、同じことを何処かに書いたり話したりしているので、お気づきの節は呆け老人のことと御見捨て置きください。

私が育ったのは川越市の北隣り、荒川・入間川・越辺川と市ノ川に囲まれた地形が名前の由来と聞く川島町（かわじままち）で、二毛作の田圃に二割位が畑の平坦な農村、庭続きの畑では自家用の前栽を作っていた。稲作の田は裏作に大麦か小麦を作り、稲の緑肥にするレンゲソウや菜種油用のアブラナの田も散見され、春には花の黄色やピンクが田の中に目立った。畑は大半が桑畑で春から秋遅くまで4回位蚕を育て、子供も10歳くらいになると時期時代の農作業に駆り出された。

・田植えなどのこと

田植え機などは勿論、車やトラクターなど便利な機械はなく、重量物の運搬の主力は家畜の牛に曳かせた荷車で、田起こしの鋤や代掻きで馬鋤（マンガといった）を牛が曳いた。馬も僅か見かけたが維持が大変なので力はあるが飼えなかったようだ。植え田の代掻き（田掻き）では、水田で方向が定まらない牛が真っすぐ歩けるように、牛の鼻（環）に括り付けた1m位の竹竿の他端を持って牛を誘導（鼻取り）するのが子供の仕事だった。子供の臆病を牛に見抜かれて手怖かった。田掻きや田植では麦の切り株が裸足に刺さって痛かった記憶がある。



田起こし用の鋤

下方の刃先が水平になるよう保持し
バーの先端を牛馬に曳かせた。

（区資料館）



馬鋤、

立てた状態で牛に曳かせて植田を
掻き土を砕き均した。

（区資料館）

田圃は10間×30間の1反ごとに畦で仕切られていて、田植えは長手方向に約1.2m間隔に人数分の棕櫚縄を張り、縄の間に1人ずつ入って6株（開いた両足の間に2株、足の外側に各2株）ずつ植えながら後ろに下がって行くが、30間を植え終わるまでに慣れない子供は痛い腰を延ばすため立ってばかりいた。子供の植えた株の列はうねっているからしばらくの間は一見すると分かった。田植え前に苗代で育てた苗を束採りにするが、小樽や木杵状の椅子に腰かけ、足はあまり動かさないで脛にヒルが喰いつき、ぬるぬるした血を吸い太ったヒルを引き離すのが大変だった。苗代は家の近くの田の一角に用意するが、未だ川の水位が低い時期なので、水を張るのに水車（ミズグルマ）に乗って足で回して水を汲み上げたが、子供は軽いので2人並んで乗って漕いだ。可動式と言っても鉄の塊みたいな発動機で筒型のポンプを運転する家も後に出てきた。



水車、
中心の両側にある柱を上方に
延し横棒を固定、後方斜めに
支柱を土に挿し上方を横棒に
結び水車が固定される。横棒
に摺り上に載って水車を漕い
だ。

（足立区都市農業公園）

終戦間際、に兵隊さんが国民学校（小学校をこう呼んだ）に駐屯し、田植え中に数人ずつ農家に派遣されたが、無経験で役に立たず早々と食事を出してご帰還願ったようだ。

余談だが、田植えで一人が植える6株の列をヒト（1）ハカとかヒトツパカ（田の草取りや稲刈りでも）といったが、一人の仕事の分量をハカ（計とか量）ということを広辞苑で今更にして知った。仕事が捗るとかハカがいくという時の捗るという言葉は、このような稲作から出たように思われる。

8月ころ稲田を縦方向に除草機を押して歩き株間の草を浮き上がらせた後、四つん這いになって1ハカずつ草をむしり土の中に埋めて歩く、田の草取りの作業は、育った稲の葉先が顔に当たり、むず痒く後からヒリヒリ痛かった思いである（猪鼻 昭二）。

活動のお知らせ

運営委員会：5月27日（土）12：30～13：30

6月24日（土）12：30～13：30

作業・観察会の後に報告や活動内容などを相談します（ラーメンしらかば）。

連絡先；坂本（090-4618-1295）

●会報の発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：7月20日（土）12：30～

活動の問い合わせは事務局 瀬田（3969-7124）まで

活動予定いろいろ

- 1 赤塚ビオトープ（赤塚トンボ池、大仏下ミニトンボ池、バッタ広場）の環境整備と観察。
集合はいずれも赤塚トンボ池前（板橋区立美術館そば）（予定を変更する場合があります）

5月27日（土）10：00～11：30 トンボ池観察・手入れ・枯れ枝の整理

6月17日（土）10：00～11：30 バッタ広場の手入れ（ササ刈りと外来植物抜き取り）

2 バッタ広場植生調査

6月10日（土）10：00～11：30

毎年、この時期に、南北の定位置に糸を張り、糸上の植物を記録しています。

3 バッタ広場の観察（虫調べ）（どなたでも参加できます）

6月24日（土）10：00～11：30 トンボ池集合

みんなで生き物をそとつかまえてポリ袋などに入れ、それをみんなで観察して、種類を調べてから放します。

持ってくるもの：ポリ袋、飲み物、帽子、草むらに入る服装（長袖、長ズボンがよい）、必要なら虫よけ薬。あれば昆虫網や虫かご、図鑑（なくてもよい）

4 日暮台公園樹林地の観察プラスα（樹林地内の推移と林縁植物を観察、ゴミ拾い等）

6月3日（土）、7月1日（土）いずれも10：00～11：30

日暮台公園前集合

● いたばし水と緑の会のURL

<http://mizumidori2.eco.coocan.jp>